

聖母マリア(御母マルヤ)の物語の日本での受容 — 潜伏キリシタンの伝承『天地始之事』における聖書物語の受け止め(3)

梶田 叡一

KAJITA, Eiichi

キーワード: 潜伏キリシタン、聖母マリア、キリシタンの聖母マリア理解、処女マルヤの懐胎、
天地始之事

長崎や五島列島の潜伏キリシタンは、幕末の「信徒再発見」の時期まで、『天地始之事』と呼ばれる長編の物語を密かに伝承してきた(注1)。その内容の一部について以下に紹介を続行し、少し検討を加えてみたい。特に『天地始之事』の基盤となった旧・新約聖書の物語やキリシタン宣教師の教えが、日本という異風土の中で、しかも厳しい禁教下の潜伏生活の中で、どのように変形された形で長年月伝えられてきたのか、そこに日本在来の思想的土壌や日本人の伝統的心性の影響はどのような形で認められるのか、瞥見してみることにはしたい(注2)。

今回見ていくのは、御母マルヤ(=聖母マリア)をテーマとした物語である。これは、『天地始之事』を構成する6つの大物語の第2のものという位置づけになっている。

この物語では、デウスの御子の母親としてマルヤが選ばれた次第がまず語られ、その成長の様子、成人してからのご懐妊と御子の誕生が語られる。具体的には、次の2つの物語からなる。

(5) デウス(天帝)の御子の母親として選ばれた処女マルヤの物語。

(6) マルヤによる御子の御懐妊と御誕生。

これらは御主イエスを主人公とした第3の大物語「御主イエスの御誕生と御成長」に引き継がれ、これに引き続いて御主イエスを主人公に展開される第4の大物語「御主イエスの御受難と勝利」の物語となる。この第4の大物語の最後の場面において、マルヤの最終的な天上での処遇が非常に幸せなものになる、との結末が語られることになる。

こうした御主イエスの御母の物語の土台となっているのは、新約聖書の4つの『福音書』と『使徒

言行録』に触れられている聖母マリアについての記述である。『福音書』等はイエスについて伝えるための文書であるから、イエスの周辺の人物として、その母親のことも筆者が必要と考える範囲においてのみ述べられている。最も古いマルコ福音書では、御主の母親マリアのことは余り語られていないが、マタイ福音書、ルカ福音書、ヨハネ福音書と執筆年代が後のものになると母親マリアについての記述が見られるようになる。ただし、最も新しいヨハネ福音書では聖母崇拜的な要素はほとんどない。イエスの受胎物語に余り関心がないだけでなく、イエスが最初の奇蹟を行ったカナの婚姻の場面ではイエスの使命に無理解な母親として、またイエスが十字架に掛けられた場面では息子の死を悼む母親としての姿が描かれている。

キリスト教が一つの共同体として発展していくにつれ、イエスの言行だけでなくその母親に対する関心も広がっていったのであろう。とりわけイエスの出生が母親の正式な結婚前のことで、育ての父親ヨゼフの実子ではなかったことについてのこだわりも広がっていったことが考えられる。そうしたイエスの母マリアに対する関心は、徐々に昇華して行って彼女を聖なる存在として崇めるといふ心情が一部で高まっていき、特に西ヨーロッパ諸国においては特別な高まりを見せ、聖母マリア信仰とも言えるほどの熱狂的な崇拜がマリアに対して捧げられるようになっていったのである(注3)。

宣教師達は日本に来た当初は天地を主宰する唯一の神のことや御主イエスのことを中心に宣教したのであるが、ある程度のキリシタン共同体が各地にできてくると、彼らの敬愛する聖母マリアについても熱っぽく語ったのではないだろうか。そして聖母に捧げるオラシヨ(祈り)やロザリオ等の信心行を教えてきたのではないだろうか。宣教師達の出身地がポルトガルやスペイン、イタリアなど南欧であり、これら諸国ではとりわけ聖母マリア崇拜が盛んであったことを忘れてはならないであろう。

したがってここでの吟味は、新約聖書に述べられているところとの比較検討を中心としながらも、潜伏キリシタンの伝承に南欧の聖母マリア崇拜の影響が色濃く見られるであろうことを前提としたものになる。『天地始之事』全体の中で占める聖母マリアの物語の分量的な比重も、新約聖書の場合と比較して非常に大きなものになっていることも、以上に述べてきたところとの関連で念頭に置いておきたい点である。

こうした基本イメージを念頭に置きながら、キリシタンの聖母マリア伝承の具体的内容を小物語(エピソード)の検討を通じて見ていくことにしたい。(小物語ごとの番号は『天地初之事』の全体

を構成する 68 の小物語に順に割り振られたものである)。

物語5【デウス(天帝)の御子の母親として選ばれた処女マルヤの物語】

この物語では、デウス(天帝)の御子の母親としてマルヤが選ばれた次第が述べられ、4つの小物語(エピソード)から構成されている。なお()内に筆者による説明的語句等を補っている。

(17)次第に人が増えていったが、死ぬと皆ベンボウ(地獄)に落ちていった。これを哀れに思ったデウス(天帝)はアンジェ(天使)に「どのようにして助けようか」と問うと、アンジェ(天使)は「デウス(天帝)の御身をお分けになれば助ける道もあるのでは」と答えたので、デウス(天帝)は御子ヒリイヨと身を分けられた。そして、まずサンガムリア(大天使ガブリエル)というアンジェを御使いとして下界に下らせられた。そして水役(洗礼を授ける役)ということでサンジュワン(=洗者ヨハネ)を下界に送るため、53歳のサンタ・イザベルの身体に宿らせられた。

←ここでの前半部分は、[人々を地獄行きの宿命から救うために救世主イエス=天主の御子=が地上に送られた]というキリスト教(パウロ教的教義)の最も重要な信仰箇条を忠実に映し出している、と言えよう(アンジェ=天使が天主に助言するというのは、キリスト教の伝統としては少し変であるが……)。また、「御子に洗礼を授ける役となるべきサンジュワン(=洗者ヨハネ)を、まずもってサンタ・イザベルの身体に宿らせた」という部分は、ルカ福音書に見られるが、そこではヨハネの母親となるのはイザベルでなくエリザベトである。いずれにせよ、歴史上のイエスは、壮年になってから家を出て、砂漠で活動していた洗者ヨハネの教団に身を投じて修業し、ヨハネが殺害された後に自立して、ガリラヤ湖畔を中心に自らの教えを説いて回ったことが知られている。この事を思えば、潜伏キリシタンの伝承において、御主の誕生を説く前にまずサンジュワン(=洗者ヨハネ)の存在を出している点は重要であろう。

(18)ロソンの国に身分の低いマルヤという娘がおり、7歳から学問を始め12歳までに上達し、後世のたすかりをどうしたらよいのかと常に考えていたところ、不思議なことに天からお告げがあって、「一生結婚しないで処女の行をすれば、たすかりを得ることができる」とのことであった。マルヤはハッと喜んで、地にひれ伏して礼拝した。

←聖母マリアの処女信仰はキリスト教の伝統の中で根強いものであるが、新約聖書の福音書を始め、明確な根拠はない。このエピソードのような天からのお告げの話は、新約聖書の記述とは無縁である。また、聖母マリアが7歳から学問を始め、といった話や、後世のたすかりのことを考えていた、といった話は、西欧キリスト教の伝承には見られないものであり、新約聖書の記述にも見られない。日本独自の御母マルヤ信仰が広がっていく過程で、マルヤが幼少時から優れた特別な存在であった、という尊崇のイメージが出来上がっていったのであろう。

(19)ロソンの帝王は妃を探していたが、自分の国にマルヤという娘がいることを聞きおよび、すぐに家老を両親の下に遣わして申し入れさせたら、両親は喜んで了承した。しかしマルヤは一向に承知しないので、無理やりに帝王のところに連れていく。帝王はマルヤを見てすっかり気に入って、自分の妃になるように言うが、マルヤは自分には大願があるのでそれは出来ないと断る。帝王は「どのような大願であろうと自分が適えてやるから妻になれ」と言うが、マルヤは「王様の持っている力は此の世だけのもの」と言い、「自分にとっては此の世は仮のもの、来世のたすかりこそが大切」と言う。これを聞いた帝王は蔵から種々の珍しいものや宝物を取り出して見せ、「自分に従うならこれらはお前のもの」と言うが、マルヤは目もくれない。そしてマルヤの方から不思議な術を披露する。天に向かって祈ると、天から食膳が下りてくる。帝王が更なる不思議を所望するとマルヤは天に祈り、6月の暑中なのに数尺の雪を積もらせる。帝王を始め皆が茫然としている中を、マルヤは天からの花車に乗り、昇天していった。

←こうした話は、新約聖書にも西欧キリスト教の伝承にも見られない。『天地始之事』に独特な興味深いエピソードである。帝王がマリアを妃に求めるが一顧だにせず断る、などといった基本エピソードは、西欧キリスト教世界では想定外の発想であろう。さらには、マルヤが天に向かって祈ると食膳が天から下りてきたり、夏の暑い中なのに雪が降ってきたりし、最後には天からの花車に乗って昇天する、といった超自然的な光景についても、渡来した宣教師たちが聞いたら驚くような話である。しかしこれを伝えてきたキリシタンの心情を踏まえて考えるならば、宣教師たちによって日本に持ち込まれたマリア崇拝の信仰が独自な形で発展していったもの、としていいのかもしれない。

(20)雪もやんで、帝王は夢から覚めたような気持ちになり、「マルヤはどこに行ったのだ、マルヤ、

マルヤ」と声を出す、昇天した後なのでどうにもならない。帝王は思い焦がれて、可哀想なことに、亡くなってしまわれた。

←こうした話もまた、新約聖書にも西欧キリスト教の伝承にも見られない。これもまた日本独自の御母マルヤ信仰を示すものであり、第4の大物語の最後に語られる天上における帝王との幸せな結婚という結末の伏線ともなる部分である。

(21)天に昇ったマルヤはデウス(天帝)の前に畏まると、「どうしてここに来たのか」とお尋ねがある。これまでのいきさつを申し上げるとデウス(天帝)は大いにお喜びになり、「本当によく来てくれた、さあ位をあげよう」と「雪のサンタマルヤ」という名をくださる。そしてすぐに下界に戻され、もとの宿所にお帰りになった。

←こうした話もまた、新約聖書にも西欧キリスト教の伝承にも見られない。ただ、「雪のサンタマルヤ」という名については、ローマ市内の教会に、聖母マリアに祈ったところ夏の暑中であるのに雪が降り、その地に聖母マリアのための教会を建てた、という伝承を持つ教会がある。宣教師から聴いた聖母マリア尊崇の様々な話が、ここでこうした形の物語として入り込んでいるのであろう。

物語6【マルヤによる御主の御懐妊と御誕生】

マルヤが天からの御使いからの不思議な知らせで懐妊するが、親の方は帝王の手前もあり、誰の子か分からぬ子を懐妊したとのことで激しく怒り、マルヤを追い出してしまう。マルヤは仕方なく難儀な旅をして12月の中頃にベレンの国に入り、大雪が降り始めたので牛馬の小屋に入って身を縮めておられたが、夜半に御主を出産される。

この物語では、こういった経緯が5つの小物語(エピソード)を通して語られる。新約聖書のルカ福音書に詳しく語られ、またマタイ福音書でも簡単に触れてあるイエスの懐妊と誕生の物語と比べての大きな相違点は、義理の父親となるヨセフの姿が出てこないことである。しかし不可思議な経緯で懐妊し、貧しい牛馬の小屋で出産する、という2つの大事なポイントと、同じように懐妊中であつたイサベルナに会いに行き、「神の子の母」として祝福される、というエピソードについては、ルカ福音書に語られているところを大筋で踏まえている。

(22)マルヤが書物を読んでいると、不思議なことに「御主天下らせたまう」という文字が現れる。間もなくサンガムリア・アリカンジョ(大天使聖ガブリエル)が天下り、マルヤの前にひざまずいて、「このたび御主が天下られるにつき、あなたの涼しい清い御体をお貸し下さい」と言う。マルヤは答えて、「御主がどこに天下られるのかと思っていたのですが、ここなのですか。すべて御心におまかせします」と喜んで承知する。「2月中旬に天下られるので、よろしく申し上げます」と言って御使いは帰っていかれた。

←この話は、基本的には、ルカ福音書第1章 26～38 節に記述のある大天使ガブリエルの乙女マリアへの訪れと問答、いわゆる「受胎告知」の物語を踏まえていると言えよう。しかしながら問答の細部においては異なったものになっている。

(23)2月中旬になり、マルヤが今や遅しと身を慎んで待っておられると、夕暮れに蝶の形で天下られ、マルヤの顔に移って「コロウド(花冠)のサンタマルヤ」と名づけられ、御口の中に飛び入られた。これで御懐胎となった。

←こうした物語は新約聖書のどこにも見られないし、キリスト教諸国の古い伝承にも類縁のものがない。日本のカクレキリシタン独自の受胎物語である。

(24)4ヶ月の身重になられた頃、マルヤは臨月のイザベルナを御見舞いになるため訪ねていかれた。ちょうどイザベルナの方でもマルヤが身重になって大変だろうと訪ねて来られようとしていた。途中のアベ川で御二人は御出合いになったが、その時イザベルナはハッと飛びすきって手をつき、「ガラサ満ち満ちたもうマルヤ、御身に拝礼いたします。御主は御身とともにおられ、あなたは女人の中で一番の果報者です御胎内の御主ジスウスは尊い存在であります」と口にした。マルヤはそれを聞いて、「天におられる我らの御親は、御名が尊ばれますようにと祈っておりますが、我が身に御出でになられました。天においても御心のままに、そして地においても同様であります。天から日々の御養いも下されています」とおっしゃった。御主はマルヤの胎内で御二人のこの言葉をお聞きになって、御誕生の後、大切な「ガラッサ(天使祝詞)」と「天にまします(主の祈り)」のオラショを作り、唱えさせられた。アベ川で作られたのでアベ＝マルヤー結び(ヒトムスビ)と言う。御二人はこの河畔で積もる物語をなされ、互いに別れて御帰りになった。

←この物語は、基本的には、ルカ福音書第1章 39～56 節の記述、聖母マリアによるエリザベト訪問を踏まえたものである。ただしルカ福音書ではアベ川の河畔でなく、洗者ヨハネを胎内に宿していた親族エリザベトの家を訪ねて3ヶ月滞在されたことになっている。また「ガラッサ(天使祝詞)」の祈りの大事な部分についての話も、聖母マリアの訪問にエリザベトの胎内の子供がおどり、それによってエリザベトは聖霊に満たされ、「貴女は女の中で祝福された方、胎内のお子様も祝福されています」と口にした、とルカ福音書で記述されているところを踏まえている。「主の祈り」の方は、新訳聖書ではイエス自身が弟子達に教えたものとされている。

(25)マルヤが懐胎しているのを知った親は大いに怒って、「お前は帝王を嫌って、誰の子が分からぬ子を懐胎した。このことが帝王に知られたら親もまた破滅だ。この家にいることはならぬ」と叱った。マルヤは仕方なく家を出て、野山に伏すなど難儀な旅をされ、12 月の中頃になってベレンの国に入られた。大雪が降り出したので牛馬の小屋に入って身を縮めておられたが、昼八つ(午後2時頃)よりゼシン(齋戒断食)をされ、夜半にお子様が生誕された。これが御主様である。

←この物語は、新約聖書の記述するところとは大きくニュアンスが異なっており、基本的に聖書とは無縁のものである。ルカ福音書では、皇帝アウグストゥスの命で、全住民が本籍地で登録しなくてはならないことになり、聖母マリアは婚約者ヨゼフと共にベトレヘムに入れ、どこの宿屋も満員だったため馬小屋に泊まり、そこで月満ちてイエスが生まれた、ということになっている。こちらの方が格段に厳しい状況である。

(26)寒い中であり、赤ちゃんの御主の身体が凍りつきそうになるので、左右に居る牛や馬が息を吹きかけてくれ、また身体を寄せかけてくれ、何とか凌いでおられた。そして牛馬の餌のための桶で産湯をつかわれた。(牛や馬からこうした情けを受けられたので、水曜日には慎み(小齋)として動物や鳥の肉を食べない)。夜が明けて、家主の女房が出てきて様子を見、「こんな汚くむさくしいところで無事にお産をされたものよ、まず中に御入りください」と家の中に連れて入り、色々と介抱し、いたわってくれた。

←この物語も、新約聖書のどこにも見られない、基本的に聖書とは無縁のものである。

しかし周囲の牛や馬が暖かい息を吹きかけてくれる情景などほほえましい。また家主の女房が

家の中に入れてくれ、介抱してくれたとの物語展開は、ホッと深く安堵できる。

先にも述べたように、この物語はここから御主イエスを主人公とした第3の大物語「御主イエスの御誕生と御成長」に引き継がれていく。そして、第4の大物語「御主イエスの御受難と勝利」を構成する5つの物語の中の最後に、彼女の最終的な天上での処遇が幸せなものである、という結末が語られることになる。

【潜伏キリシタンの御母マルヤ物語の特異性について】

以上に見てきたところを踏まえて、『天地始之事』で記述されている御母マルヤのイメージの特徴についてまとめてみることにしよう。

キリスト教には初期の段階から処女マリアが超自然的な経緯でイエスを懐胎し、といったユダヤ教の一部にも由来する強い聖母信仰の要素があると言われる。そうした伝統が宣教師の話の底流にも流れていたためであろうか、新約聖書の福音書の主人公はあくまでもイエスであるにも関わらず、潜伏キリシタンの伝える御母マルヤの物語は第2の主人公と言ってもよいほどの力を入れてマルヤを扱っている、という印象が強い。そうした中で、新約聖書には見られない『天地始之事』独自の特異な性格付けも見られないではない。その主要な点をここで再確認しておくことにしよう。

(1)『天地始之事』でのマルヤは、7歳から学問を始めたり、後世のたすかりのために処女の行を志したり等、非常に優れた特異な資質を持つ娘であり、成人してからは帝王に妃として望まれるほどの目立った存在とされている。しかし新約聖書でもその後の聖母伝承でも、むしろ特別なエピソードのない「普通の娘」としてマリアを描き出している。我が国のキリシタン達の御母マルヤの基本イメージには、宣教師達が持ち込んだ聖母マリア崇拝の色彩がこうした形でも反映されているのではないだろうか。

(2)新約聖書には聖母マリアの両親のことは一切触れられていない。また南欧を中心としたその後の聖母マリア信仰やそれに関連した伝承でも、マリアの両親のことは一切出てこない。ただし、新約聖書の外典『ヤコブ原福音書』(紀元 150 年頃に書かれ主として東方教会で読まれたという)では、マリアの両親ヨアキムとアンナの物語がやや詳しく語られている(注4)。しかし、内容的には『天地始之事』で述べられているところとは全く異なったものであり、日本のキリシタンにまでこの外典物語が届いていたとは考えられない。いずれにせよ、『天地始之事』では、マルヤの両親は

娘と帝王との結婚を望んで独自の動きをしたり、また娘マルヤが父親の分からぬ子を宿した折には怒って娘を家から追い出したりする。マルヤが両親から全面的に理解され支援されて成人したわけでないことが示されている。無理解な親の下で苦勞しながら成人していく美しく優れた娘がやがて大きな幸せを得る、といった日本の昔話にもよくある物語構成がどこ底流に息づいているのであろうか。

(3) マルヤの懐胎について、新約聖書では大天使ガブリエルによる「受胎告知」のみが描かれる。これに対して『天地始之事』では、大天使ガブリエルによる「受胎告知」に加え、マルヤが待ち望んでいると御主が蝶の形で胎内に宿するという独自の物語としている。

何となく懐胎の事情描写にニュアンスの違いを感じさせられる。日本のキリシタンの受け止めの方が、どこかメルヘンチックで美しい情景のように思われるのであるが如何であらうか。

(4) イエス生誕の折には母マリアの婚約者であり、イエスの誕生と成長の折りには一家の長であり、またイエスが成人してから洗者ヨハネの集団に身を投じて修業者になるまでやってきた大工の仕事を仕込んでくれた義父ヨゼフの存在が新約聖書では重い意味を持つが、『天地始之事』には一切そうした人物は登場しない。このため、イエスの出産までの旅や出産そのものの場面についても、聖書ではヨゼフが付き添っているのに対し、『天地始之事』ではマルヤの単独行という厳しい姿となっている。さらに聖書の記述では、大工を営む父親ヨゼフが妻マリアと息子イエス(後には弟妹も)が一つの家族として生活を営んでいる(時に「聖家族」と呼ばれる)ことが推察されるが、『天地始之事』においては、御主が成長する家族内には父親の影も弟妹の影も無く、基本的には母1人息子1人の母子家庭である。第4の大物語「御主イエスの御受難と栄光」の最後の物語15「御母マルヤを初めとする御主ゆかりの人達の天での処遇」の中で、デウスとイエスとマルヤが三位一体的な存在として語られることになるが(小物語 60)、ここで全てを主宰する父デウスを特別な存在と見なすとすれば、マルヤとイエスとはまさに母子一体であるということになる。日本のキリシタンにとっての聖母マリアは、マリア観音に具象化して示されるような母子一体的様相を強く帯びたものであることを、ここからも見てとることができるのではないだろうか。

少なくとも、ここに上げた諸点については新約聖書とは異なった独自の御母マルヤ物語を『天地始之事』は語っているのである。これが何に由来するものであるか、そのことが何を意味するものであるかについては、今後の更なる検討を待ちたいと思う。

(注1)梶田叡一「潜伏キリシタンの伝承物語『天地始之事』」奈良学園大学紀要、第3集、2015年9月、pp. 29～37。

梶田叡一「潜伏キリシタンの伝承物語『天地始之事』(その2)」奈良学園大学紀要、第6集、2017年3月、pp. 15～21。

(注2)この小論との関連でこれまで筆者が書いてきた主なものを以下に掲げておく。

梶田叡一「旧約聖書『創世記』の物語の日本での受容——潜伏キリシタンの伝承『天地始之事』における聖書物語の受け止め」プール学院大学研究紀要、第58号、2018年1月、pp. 1～12。

梶田叡一「御主イエスの御誕生と成長について潜伏キリシタンは如何に語り伝えてきたか——『天地始之事』における聖書物語の受け止め」桃山学院教育大学紀要エレノア、第1号、2019年4月、pp. 5～16。

梶田叡一「御主イエスの御受難と栄光について潜伏キリシタンは如何に語り伝えてきたか——『天地始之事』における聖書物語の受け止め」桃山学院教育大学紀要エレノア、第2号、2020年3月、pp. 5～12。

(注3)聖書の正典はもとより初期キリスト教の諸文書までを踏まえて聖母マリアについての記述と聖母マリア崇拜の勃興を跡づけたものとしては、次のような文献が参考となる。

荒井献「マリア観の諸相」1977年(『荒井献著作集5』岩波書店、2001年、所収)。

朝山宗路『マリアの素描——聖母への敬慕を原典に読む』サンパウロ、2008年。

(注4)注3として挙げた文献に加えて、以下の文献を参照されたい。

荒井献「正典外の諸福音書」1989年(『荒井献著作集5』岩波書店、2001年、所収)